郷愁誘う撫養の風景

あすから 鳴門で飯原一夫絵画展

徳島市の画家飯原一夫さん(89)＝徳島文理大名誉教授＝の絵画展「追憶の昭和 徳島 撫養慕情」が、13日から24日まで鳴門市のキョーエイ鳴門駅前店で開かれる。古里徳島の懐かしい風景や人々の暮らしを描き続けている飯原さん。独特の画風で描いた鳴門の風景を中心に、計65点が展示される。

飯原一夫さん

飯原さんは1937年、小学校3年生の時に撫養町南浜に転居し、2年間過ごした。鳴門をテーマにした作品の多くは、当時を思い出しながら、昨年春から1年間で描いた。

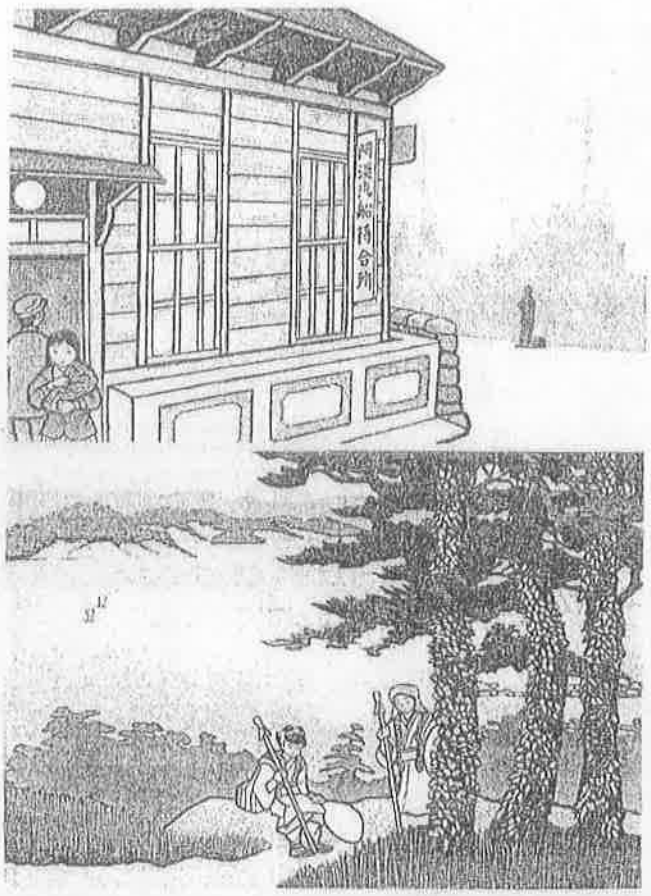
「阿淡汽船待合所」は、撫養町岡崎と淡路島の福良を結ぶ連絡船の待合所でたたずむ人を描いた。22～85年に就航し、飯原さんも乗ったことがあるという汽船だ。レトロな木造の建物や、港にうっすらと見える船が往事をしのばせる。

「鳴門海峡」は、帆掛け船が行き交う鳴門の海を背景に、金剛づえを手に歩き遍路をする母娘が情感あふれるタッチで表現される。阿波人形浄瑠璃のお弓とお鶴を連想させる絵が郷愁を誘う。

このほか、洋風のモダンな建物が印象的な郵便局と撫養街道のにぎわいを表現した「撫養郵便局前」、1955年ごろの岡崎海水浴場を表した「岡崎海岸バンガロー」といった作品が取り上げられる。

飯原さんは「撫養に住んでいたのは戦時中だったが、いい思い出がたくさんある。集大成のつもりで記憶を残しておきたかった」と話している。

（奥村靖之）



飯原一夫「阿淡汽船待合所」㊤と「鳴門海峡」

30.9.12
徳島 11-1 面